



惚れ症の ハーフエルフさん

Half-elves of Fall in Love

小説 ● 神尾丈治
イラスト ● サクマ何貴

2

試し読み版



Kill Time Communication Presents
Beginning Novels Series

“Halfelves of Fall in Love”

- Volume Two -

Story by George Kamie
Illustration by Shiki Sakuma

第 一 章 ● 思 い 出 の あ り か

005

第 二 章 ● 氷 竜 と 至 剣 聖

040

第 三 章 ● エ ル フ た ち の 領 域

124

第 四 章 ● 聖 域 の 狂 獣

184

第 五 章 ● 平 穏 の 日 々

225

第 六 章 ● 剣 聖 た ち の 戦 争

287

エ ピ ロ ー グ ● 誰 も が 笑 う 、 そ の 街 で

357

特 別 編 3 ● お つ か れ さ ま

369

第一章 思い出のありか

王都を発ってから数時間。

「……さ、寒くなってきましたわね」

オーロラが服の二の腕のあたりを握り締めて呟いた。

……つて。

よく考えたら換気のいい南方製馬車。

もう雪が降っているであろうポルカに向かっているのに、

みんなは砂漠あたりにいた時と服装が変わっていない。いくらなんでも暢気すぎる。

「は、早くみんな何か上に羽織れ！ 山の向こうに行ったら本格的に寒くなるぞ！」

「……姉上、防寒具は？」

「ライラちゃんがいまいこんでたはずだけど」

ちびライラの幻像に目を向けると、馬車の長椅子の手すりに乗ったライラは頭を掻いて気まずそうに笑った。

「……人間体の方にくつついておる。降りんと出せん」

「降りろ!! この先マジ寒いんだから」

段取り悪い……。

ポルカとトロット王都の間には山地がある。

ポコポコとそびえるいくつもの峰の奥で、一際高くて手間取るのが青蛇山脈の枝毛のような子蛇山脈。その先から一気に寒くなる。

「ほれ」

馬車を下ろして人間体に戻った、というか変身したライラがパチンと指を鳴らすと、ライラの周囲の空間から忽然ともこもこした衣類が出てくる。

「こんな服を着るのなんて何年ぶりだろう」

キルトのコートを纏まといながらディーアーネさんが居心地悪そうな顔をする。

「私は30年ぶりがしらねー。東方山地におくすりの勉強に行ったとき以来だわ」

……セレスタってあんまり寒いところないからなあ。

「いよいよですねー」

「セレン」

子蛇山脈を見上げながら、改めて感慨にふける。

……もう、15年も離れていた故郷。

改めて、これから帰るのかと思うと微妙に不安になる。

「もう人生の半分以上はポルカから離れてたんだなあ……」

……

「？」

「いや、さ。帰ったらどうしようとか、ちゃんと計画立てて」

たいと思うんだけど、なんか細かいところ思い出せなくて」

「あはは。まあ、子供でしたもんね」

「……だよなあ」

10歳で離れて、25歳の今まで帰れなかった街。

まともに思い出せなくて当たり前だ。

断片的な記憶の中にある風景は、爺さんの代から建つて古い自宅と、街の霊泉でありがたげに水を受け取る人々と、主に覗きにはかり行っていた温泉と、それとアップルと乳繰りあつた猟師小屋。

それと親父の仕事場。

あとはほとんど思い出せない。結構走り回つてたはずなのに。

「ちよつと怖い」

「……そうですか?」

「バツソンなんてほとんど農村みたいな状態から、たった七年で結構な街になつちやつたんだぜ? 15年も経つたポルカがどうなつてるのか、全然わかんねえよ」

「確かに……住み着いたばかりの頃とは結構様子変わりましたしねー」

「そっかあ……どうなつてんだろうな、ポルカ」

「もう少しですよ、アンデイさん。もう少しで、アップルとの約束……果たせませす」

「ああ……」

約束か。

……アップル。俺の初恋の人。俺を面食いにして、首輪好きの変態野郎という誤解を作つた張本人。

……いや嫌いじゃないけど。でもそういうのとはちよつと違うんだ。雌奴隷とかそういうつもりじゃなくてもつと純粹にツバ付け的な意味でだな。

「アンデイー!! セレンー!!」

「……みんな着終つたみたいですね」

アンゼロスに呼ばれ、俺たちは馬車へ戻る。

なんでこんなに不安を感じてしまうんだろう。

ポルカに戻るということは、少なくともマイナスではなはずだ。

俺の足にしろ、アップルの意識にしろ、確かにしつかり治るといふ保証があるわけではないけれど。親父には怒られるかもしれないけれど。

それはプラスじゃなくて最悪でもゼロなだけ。マイナスというわけではない。

とにかく帰るといふことに、悪いことなどないはずなのだ。

でも、何故か不安は胸から離れなくて、俺は馬車の中でずつとセレンの手を握り締めていた。

懐かしいポルカの街。

雪深い街道の只中に着地し、いつものように馬車を隠す。「荷物はできるだけ持っていけ。馬車に置いておいたら凍るばかりだから」

ディアーネさんの号令で、みんな持てるだけのものを持って、町の入り口へ。

そこには若い門番が二人立っていた。

「ようこそポルカへ。徒歩ですか」

「そんなところだ」

ディアーネさんがそう言って通り抜ける。……別に邪魔もされない。

「へえ……本当にエルフでも入れるようになったんだ」

思わずそう呟く。と、門番は怪訝な顔をして俺……じゃなくて、隣のセレンを眺め。

「!! セレンちゃん!! セレンちゃんじゃないか!!」

「ど、どもー」

セレンが手を振ると、門番は二人ともとろけた顔をする。

……アイドル化してたっぽい。

確かに人間基準ではちよつと見なくらい可愛いからなあ。あ。

「つて、なんだよセレンちゃん。こんなに美人ばかりたく

さん連れてきて」

「鍛冶屋のアンディを捜しにいったんじゃ……」

……そして俺は、もはや顔を見たつて識別されないっぽい。

そりゃあ……うん、10歳と25歳じゃ別人みたいなものだけどさ。

「ほら、この人アンディさんですつてば」

「お、おお! アンディ!」

「懐かしいなあ!」

「……誰だよお前ら」

「なんだ忘れちゃまったのか、薄情だな! ほら、俺饅頭屋のキール!」

「ああ、あのデブの。痩せたなあ」

「デブって言うなあ!」

「俺覚えてるか、俺。酒屋のジョニー」

「忘れた」

「ひでえなオイ!」

……ああ、帰ってきたんだなあ。

顔で思い出されないのはちよつと寂しいけど、確かに俺の故郷だ。俺が生まれ育った街だ。

「しかしなんだお前、足、駄目にしたのか?」

饅頭屋の元デブ、キールが俺の恰好を見て心配そうな顔

をする。

「ああ。……これな。これ治しに来たんだよ」

「治しに？ 帰ってきたんじやなくて？」

「ああ。俺今セレストア軍で十人長してて」

「マジかよ。十人長って王国軍で言ったらアレだろ、えー

と……」

「少尉」

「そうそう」

王国軍では十人長を少尉、百人長を大尉と言っていた。ちなみに準兵正兵と將軍はセレストと同じで、元帥位は大將軍という。

「治したらまたどっか行っちゃうのか」

「まだわからない。治るかどうかもわからないし、残るにしたって親父と話さない」と

「あー……えーと」

キールが微妙な顔をした。

なんだ？

「と、とにかく。セレンちゃんが帰ってきたなら男爵にち

ゃんと報告しないと」

ジョニーがキールをハルバードの柄でつつく。

「そ、そうだな。俺行ってくる」

「頼むぞ。……とにかく、おかえり、セレンちゃん、アン

デイ！」

ジョニーが番兵らしく、胸を張って俺たちに道を譲る。

「……男爵と知り合いなのか、セレン」

「え、ええと……私がどうこうというか、アップルの絡みで」

「ああ」

アップルはトロットIIセレストア側と北方エルフとの対話の促進に繋がった存在。

その友人というか身元引受人という形で、やはり面識はあるわけか。

「……よし、とりあえず俺のことは後回しにして、まずはアップルに会いに行こう」

「アンデイさん」

「どうせ足にしたって親父にしたって急ぐことじゃないでもアップルは一刻も早く目を覚ましてやったほうがいい」

……まあ、結果が出るのが怖いことを少しでも先送りにしようって魂胆でもあるけどさ。

でも、一番優先度が高いのは間違いない。

「わかりました。……病院、行きましょう」

「その間に私は宿を取っておく。姉上、頼んだぞ」

「はいはい」

ディアーネさんが集団から離れる。
セレンのあとについて、あとの俺たちはゾロゾロと歩き出した。

ポルカの病院ははっきり言って流行りようがない。

医者より優秀な霊泉がある。わざわざ医者にかかって切ったり貼ったり得体の知れない薬を飲んだりする意味がほとんどないのだ。

それでも一応、病院は立派だった。

「ようこそポルカ病院へ。……つて、セレンちゃん！二年ぶりじゃない！」

「どもー。……アップル、あのままですか」

「ええ。霊泉の水を飲ませたりは定期的に行っているんだけど」

受付にいた看護婦は困った顔をした。

「霊泉でどうにもならないんじゃないウチの先生にもどうにもできないしね……」

やる気あるのかないのかさっぱりわからない。

「やっぱり……でも、アンディさんと、セレスターのダークエルフのお医者さん、探してきました！」

「どうもー。魔法医のヒルダです」

「あ、あらあら」

看護婦は慌てて受付から出て、医者を呼びに行く。
そして、現れた医者がヒルダさんと何分か話し込んだあと、俺たちは奥の病室に通された。

アップルは、まるで時が止まったように静かに眠っていた。

「……アップル」

俺は、彼女に対して、初めて名前を呼ぶ。

俺の初恋の人。

俺にだまくらかされてエロいことをされて、それなのに俺に夢中になってしまった変なハーフエルフ。

……今見てみると、確かにセレンとは違う。髪型や髪の色、耳の長さやナイスパディなところは確かに似ているけれど、同一人物というほどに似ているわけではない。

「セレンの髪型とかは、わざと似せたんだっただか？」

確認するようなアンゼロスの質問に、セレンは複雑そうに微笑んで答える。

「はい。……まあ、もともとそんなに違う恰好していたわけじゃないんですけどね。よく姉妹と間違えられましたし」

「……血は繋がってないのか？」

「全然別です。アップルは北の森の紫の氏族のハーフで、私はアフィルム帝国の東側にいる森エルフのハーフです」

初耳だ。

……というか、俺、セレンのこともアップルのことも本当にほとんど知らないなあ。

「えーと……うーん。やつぱりそっかー……」

その間にも、ヒルダさんがアップルの頭や胸をあちこちなぞり、調べている。

「……症状聞いた時にもしやとは思ったんだけどねー」

「どうなんです？」

「一度死んじやってる」

「……はい？」

あつさりと深刻そうなことを言い放つヒルダさんに、聞き返す。

ヒルダさんは軽く溜め息をついて、アップルの胸の真ん中やや左側を、トントンと叩いた。

「心臓射貫かれちゃったんだからそりや即死よ。……でも、霊泉つてよほどの力なのね。それでもギリギリ生命活動を再開させられた。たまーにね、ギリギリアウトのタイミングで大出力の医療光術叩き込まれて、こうなる人いるのよ」

「……で、その……つまり？」

「魂が一旦抜けかかって中途半端に引っかかっている状態。ひっくり返りかけたお鍋を慌てて力づくでフタおさえた感じ？ 半分はこぼれかけて、現行時空からズレてるの」

「い、いやその、状態じゃなくて、治せる見込みは？」

喉が渇く。心臓がバクバク言う。

……駄目だったら、どうしたらいいんだ？

このままつてわけにもいかないし、かといってアップルを……殺す？

馬鹿な。

……とか考えていた俺に、ヒルダさんはまたもやあつさり。

「治るわよ」

「……よ、よかつ……」

「でも」

「！」

ビクツとする。何か凄いペナルティあつたりするのか？

「……えーと、アンディ君以外ちよつと全員出て。大丈夫だから。ちよつとね」

いきなり全員、医者や看護婦含めて追い出される。

そして。

「セックスで起こすやり方しか知らないの」

「……は？」

とんでもないことを言い出した。

「どういうことですか」

「えーと。……こぼれちゃってるっていう例え話に繋げる

とね、こぼれた具を戻すのは魔法のできるのよ。でもこぼれた汁はそれじゃ戻らない」

「……はあ」

「で、その汁っていうのは魂と肉体の間を繋ぐための特殊エネルギー体でね、普通は生まれる時に一定量が合成されて一生同じものを使うから基本的には後天的に発生させられないの。一応魔法で合成することも不可能じゃないんだけどカラーアジャストの精度に問題があつてね、そこを埋めるための秘薬もあるんだけどこれがまた入手困難で」

「あの全然わからないんで」

「……えーとね。要は魔法かけておちんちん入れて中出しすると子宮の中で覚醒に足りないものが発生して目が覚めるんで思い切つてやつちゃえ☆」

「……えー」

いやその。

いくらなんでも寝てる女の子を犯してる最中に感動の再会とか酷くないですか。

「大丈夫、避妊魔法はかけておくから！」

「そういう問題じゃないでしょう。なんか、ほら」

「でもアンディ君の雌奴隷なんでしょう？」

「……………そういう話ではありませんが」

「じゃあいいじゃない。ヨッ、使わせてもらつてるぜ！」

でオールOK☆」

「……………」

「あーん、そんな顔しないの！ 仕方ないじゃない、今のところ確実に覚醒させるには本当にこれしかないんだから」

「……………」

ごめんアップル。本当にごめん。

……………いただきます。

ヒルダさんにちんこに魔法かけてもらい、ついでに足も動くようにしてもらつて、アップルの布団を剥ぎ、パジャマの下を脱がす。

下着も脱がす。

……………全く抵抗しない美人の女の子を脱がしてくつていうのも、意外とこう、来るものがあるな。

「大丈夫、アンディ君？ 私が代わりに盛り上げてあげよつか？」

「い、いえ、おかまいなく」

……………アップル。

俺の、俺の……………俺が一番欲した、15年間想い続けた、ハーフエルフ。

その子と、繋がる。

本当は色々話してから、もっと当たり前に抱き合いたかった。

万全の状態で、受け入れて欲しかった。

でも、君とまた話したい。一刻も早く、君の笑った顔が見たい。

だから。

「ちゅ……んくっ」

無毛の、全く濡れていない陰唇に舌をつけ、充分に唾液をまぶしつける。

正確にはまだ生き返っていないアップルの股間は、まだ快楽と連動していない。だからいくら刺激しても自ら濡らすことはないらしい。

だからできるだけ唾液を流し込み、塗りつけ。

……そして、俺は彼女にのしかかった。

「アップル……!!!」

自分の唾液だけで濡れた、他人の膣。

そこに無理矢理押し入ろうとする俺。

案の定、引っ掛かりがあつて、処女だとわかる。だがその処女膜を切り裂こうとしているのに全く力が入っていない下半身の感触は、なんだか屍姦をしているようで少し空しい。

が、その温かみが、本物の生きた彼女だと主張している。

本当の意味で、本物に戻るために。

本当の彼女と抱き合うために、俺は、唾液と血だけの膣を強引に犯し、腰を振りたてた。

「……っく……!!!」

そして、義務的に、射精。

耳に響く、自分だけのドクドクという脈動が、これはただのオナニーだと思い知らせる。

誰かと抱きあっている時は、相手の鼓動が聞こえるのに。その鼓動と自分の鼓動が重なることが、嬉しいのにも。

でも。

これで……。

「これで、いいん……です、よね？」

「ええ」

ヒルダさんが頷く。

その時、膣がピクッと動いた。

眉根がピクッと動くのが見えた。

膣で作ったようだった顔に、血色と表情が生まれ始める。

痛み、困惑。

……そりやそうだろう。目覚めのその時、いきなり処女地を犯されて中出しされているなんて、普通一瞬で納得できたらおかしい。

それでも、俺は。



15年想い続けてきた、彼女に「会える」。

その瞬間を、ドキドキしながら待った。

そして。

「……………」

彼女の目が開く。

俺に焦点を結ぶ。

次の瞬間。

「き、きやあああああああああああつ!!」

耳を劈つんざく悲鳴。そして、突き飛ばされる俺。

「つぐ、ああつ!!」

無ぶなま様に転がる。

……………いい、いいんだ。そりや混乱するさ。だって10歳児が

25歳の男になったんだもの。わからないさ。

……………と、思っアッブルを見上げると。

「や、やあつ……………何、どうして……………セレン、セレンツ!!」

思いつきり混乱。

やあ俺がアンディだよ、なんて言える雰囲気ではない。

が、その声を聞いて、真っ先にセレンがドアを体当たり

するようにして開けて飛び込んだ。

「アッブルつ!!」

「セレン……………セレン、よかった……………あ、あの人が、私を……

……いま、犯して……………」

「アッブル、大丈夫、あの人アンディさんだから。よかった、アッブル……………本当に……………!!」

セレンはアッブルを抱きしめて、涙しながらあやす。

「……………な、何が、大丈夫って何、誰、って……………!!」

「アンディさんだよ、アッブル……………私たちのご主人様の、

アンディさん……………15年も経ってるから大きくなっちゃった

けど、あの人がそうなの」

「……………セレン……………?」

アッブルは、セレンの肩を掴み、ゆっくりと引き剥がす。

「……………15、年……………?」

「アッブル、私たちがポルカに来て、アンディさんに会っ

て、もう15年経ったの。アッブル、2年も眠ってたの」

「待って」

アッブルは首を振って、俺とセレンを見比べる。

「……………ポルカって、何?」

「アッブ、ル……………?」

「大体、なんでセレン、元の姿に……………? トレント病にか

かってたんじゃ……………」

「アッブル、え、ちよつと……………待って、記憶……………記憶、ど

こまであるの?」

「……………だって、昨日、アフィルムの国境抜けて……………」

「……………アッブル」

セレンが信じられない、という顔をした。

「……その先の記憶、ないの？」

「……………」

数十分後、セレンが病室から出てきた。

「アンディさん、ごめんなさい」

「いや…………どうなってるんだ？」

廊下ではディアーネさん以外が全員で待っていた。

その俺たちに向かって、セレンは気まずそうに口を開く。

「……昔のアンディさんに出会う三ヶ月くらい前から、アップルの記憶、ないみたいです」

…………力が、抜けた。

彼女は、まるつきり他人を見る目つきだった。

「あなたが、アンディ・スマイソンさんですね」

「…………ああ」

「お医者さん…………ヒルダさんとセレンに、聞きました。…

…セレンのトレント病と、私の半死状態を、あなたが助けてくれたんですね」

「…………そうなる」

「その…………ありがとうございます。その事実だけは間違いないみたいですから、お礼だけは言っておかなくてとは

思いました」

「…………うん」

ハーフェルフの少女は戸惑ったような口調で、あまり意思のこもっていない礼を口にして、それから俺をじつと胡散臭い他人を見る目で凝視した。

「アップル、なんで睨むの？」

「セレン…………だって、この人」

「アップルだって大好きだった人なんだよ？ 離れたくないって泣くぐらい、大好きな人だったんだよ？」

「でも、やっぱり普通じゃないよ。首輪とか、雌奴隷とか…………セレン、やっぱりおかしいよ」

「アップル!!」

声を荒らげるセレンを、俺は手を上げて制止する。

「確かに普通じゃないんだ。彼女の言うことは間違つてなんかない」

「アンディさん…………」

「…………間違つてないよ」

俺は自分でも驚くほど、物分かりのよさそうな声を出していた。

「それより、15年以上もの時間を忘れちゃったんだ。彼女のほうが大変だろ」

「……………」

アップルは、ずっと不安そうな顔をしていた。

唯一にして最高の味方であるはずのセレンが、なぜか知らない男の奴隷を宣言して、アップル自身も雌奴隷のはずだと言いつ張っているんだ。

ただでさえハーフェルフの迫害されつづけの人生で、同類の親友が突然そんなことを言っている。何もわからないなら、今、彼女は絶望的な心境に違いない。

今は彼女には味方が必要だ。

「セレン、しばらくアップルについてあげてくれ」

「……はい」

セレンの手には、アップルに返すはずだった古ぼけた首輪。

行き場をなくした幼稚な約束。

……俺の人生の支えは、こんなにもあつけなく意味を失った。

そのことに実感が湧かなくて、口では気遣いのある言葉を紡ぎながら、胸の中は急に霧もに包まれたようにぼんやりして、ポツツと感情みたいなものが生まれては身体に行き渡る前に消えていく感じを味わっていた。

こういう感じを空虚っていうんだろうか。

セレンを病院に置いて、俺たちは通りに入る。

「この症例で記憶が消えることなんて、あるんですか？」

ヒルダさんに尋ねると、淡々と答えが返ってきた。

「そういうこともなくはない、つてところかしら。干からびたお料理に水をかけても、全部が元に戻るわけじゃないでしょう？」

「……なるほど」

「でも、もしかししたら記憶が混乱しているだけかもしれない。いつか思い出すかもしれないし、思い出さないうかもしれないわ」

「魔法で何とかできないんですか」

「魔法は心を癒せないわ」

ヒルダさんの声が、少しだけ寂しそうな色を帯びる。

「自分の記憶を人に見せることはできるし、偽りの事象を送り込むこともできる。魔法を使って洗脳する方法だつてあるわ。でも、本人の抱えた心の傷、本人の抱えた思い出、そういったものをもとどおりにしてあげる方法は、やっぱりない。もともと心はみんな違う形をしているし、繊細なものだから、手を入れることは必ずしも癒してはならないの。それでも手を入れるのは癒してはなくて改造よ」

「……そうですよね」

例えば、もし、今からヒルダさんが魔法を使ってアップルを15年前の俺の記憶のとおりの子にしたつて、それはア

アップルにとって癒しではない。ただの押し付けだ。

記憶が壊れてしまっていたとしても、アップルの「今」はそこにしかない。これがもしも俺なら、多少の記憶が消えたって軍やポルカといった信頼できる世界から補えるが、世界中のどこにも、彼女の記憶を補えるものはない。

彼女と俺を繋ぐものは15年前の幼稚な約束だけだ。それを改めて実感した。

彼女は俺のことを何も知らず、俺は彼女のことを何も知らないまま、ただぬくもりがそこにあったから求めあい、いつか再び温めあおうと約束しただけ。

……俺は、彼女にとって何でもない。

そのことが、なんだかじんわりと悲しかった。

じんわりで済んでいるのは、きっとセレンやディーアーネさん、アンゼロスやライラたちが背中を支えてくれていたからなんだろうけれど。

とはいえ、いつまでもアップルの頭の中ばかり気にしていても仕方がない。

俺は次の用件を済ませるために進むことにした。

「アンディ、どうだった？」

ディーアーネさんが追いついてくる。宿は取れたらしい。

俺がこちらの状況をどう説明したものか言いあぐねてい

ると、ヒルダさんが簡潔に説明してくれる。

「……そうか、記憶が」

「ヒルダさんの話ではよくなる可能性もないわけじゃないみたいなんぞ」

「あくまで可能性だけだね」

念を押すヒルダさん。

……まあ、結局その程度の望みなのだろうけど、信じておかないと頭がうまく働かない。

「とりあえずこちらも八人分の宿は取れた」

「ウチが使えれば……いいんですけどね」

言いながら、親父になんと説明しようかと少し憂鬱になる。

……ああ。

少し、心がうまく動いた感じがする。

空虚に浸りすぎないようにしよう。俺、今、きつと冷静なつもりでもすぐく女々しいから。

「ほ。お主の家とやらは八人も来客を泊められるのかえ？このあたりはそんなに家が大きいわけでもないようじゃが」

「うーん……まあ正直、俺の部屋と客間に四人ずつ雑魚寝

とかそんな感じかも」

「セレンたちが住み着いていたっていうところを利用する

のもしんじやないか？」

「いやいや、アンゼロス。獵師小屋ってマジでなんにもないからオススメしにくい」

ちよつとずつ、ちよつとずつ調子を取り戻しながら、俺たちは町外れにある俺の実家を目指して歩く。

そして、そこに辿り着く。

三代前からの俺の実家。地面にへばりつくような感じの板葺き屋根と煉瓦の家。

「若い鉄のいい匂いがするだな」

ジャンヌがうんうん頷きながら言う。

「若い鉄？」

「鍛えたての鉄は匂いが違うだよ。ちゃんと工房が動いてるだ」

「ああ、そういうことか。わかる気がする」

ドワーフの鉱物に対する感覚はズバ抜けすぎていて俺にはわからないことも多いが、鍛えたての鉄というのはなんとなくわかった。

「親父、いるかな」

ドアをノックしようとして、他人行儀な気がして、ドアノブに手をかけようとして、門番のキールたちに気づいてもらえないほど自分の容姿が違っていることを思い出して……ドアノブとドアの平面との間で数回手を往復させる。

そんな俺の動作をみんなは微笑ましげに見ている。

意を決して、俺はドアノブに手をかける。と、向こう側からガチャッとドアノブが回って、向こう側から顔がひよつこり飛び出してきた。

「うわっ」

びつくりする。

その顔は、俺の胸ぐらいの高さ。つまりまだ子供。女の子だ。

……子供!!

「え、えっ!!」

俺、確か一人っ子供だったはず。

親父とお袋が、俺がいなくなった隙に頑張ったとしたら確かに今ごろこのくらいだろうけど。まさか。

「おじちゃん、誰」

「え……えと、ここんちの息子……のはずなんだけど」

子供は俺を胡散臭そうに見上げた。

……角。2本角。

人間に見えるがオーガの血が入ってる。

「おかーさん、なんかうちの子だっというおじちゃんが来てるー」

「お、おい」

なんかすげえ嫌な字面になった。

と、すぐに軽い足音がして、女が出てくる。

「あの、お間違いないですか？ それとも、こんな昼からお酒を召されたのですか」
知らない女だ。

お袋じゃ、ない。

……待て。

ここは爺さんの時代からずっと続いた俺の家、だった、はず。

「誰だ、あんた」

「あなたこそどちら様ですか」

「俺はアンディ・スマイソン、こここの家主の息子のはずだ」

「知りません」

女はいかにも怪しい奴を見る目で俺を見た。

「ちよつと待て、どういうことだよ」

「どうもごうもありません、ウチはあなたの家ではありませ
せん。お引き取りください」

にべもない。

……待てよ、「冗談じゃないぞ」。

「おい……そんなわけないだろ、どうなってんだよつ」

「落ち着けアンディ……！」

ディアーネさんが俺の肩を引く。

俺はその力には逆らえない。しかし目は自然に女を睨み

つけてしまう。

女はドアを叩きつけるように閉め、奥に向かって誰かを呼んだ。

そして、数十秒して、ドアが再び開く。

今度は巨漢が現れた。

「あの、どちら様で……お客さんなら工房に回っていた
かないと」

「どちらさんって、俺は……」

と、その巨漢に見覚えがあることに、ようやく気づいた。

「……ジャッキー、さん!？」

「え……あ、もしや!？」

ハーフオーガの巨漢、ジャッキー・ルメイロ。

親父の弟子だ。

ジャッキーさんの後ろから、なおも女が俺を威嚇する。

「あなた、しつこいなら憲兵呼びましょう」

「馬鹿!! この人は俺の師匠の息子さんだ!! なに失礼な
こと言ってるやがる!!」

ジャッキーさんが怒鳴りつける。あまりの大声で、屋根
の雪がいくらか落ちた。

……ちよつとスツとした。

「申し訳ない。家内です。娘がちよつとイジメられてるせ
いか、警戒心が強くて」

「ああ……」

なるほど。人間不信か。

「それより、親父とお袋は……？」

「……あ、アンディ坊ちゃん、知らないんですか」

「？」

嫌な予感がした。

夜の月明かりの下で、俺は温泉に浸かっている。本格的に虚脱していた。

「……………」

ジャッキーさんの話は衝撃的だった。

親父は、随分前に馬車に轢かれて死んでいた。

親父は、俺が戦争に駆り出されると聞いてから、酒の量がかなり増えたらしい。

トロット軍団に組み込まれた連中はまだ安否はわかるが、俺たちは戦争最終盤に国境近くに配置され、これから突撃しようというところで戦争が終わり、そのままセレスタの内地の軍団に組み込まれたので当初は行方の追いやがなく、死んだものと思われていたらしい。

それで毎晩へべれけになるまで飲むようになって、そしてある日、町外れをふらふらしていて駅馬車に轢かれた。

このポルカの住人は、相当な大怪我でも大病でも、霊泉

のおかげで滅多なことでは死なない。

だが親父は馬に踏まれ車輪に胸部を潰され、完全に即死だったという。

思いつく限り最低の最期だ。

そしてお袋は息子と夫を失い、失意のうちに家を手放す決意をする。

もともとポルカは魔物も出やすく、エルフからの突発的な攻撃もある。女手ひとつでは雪下ろしもままならない。霊泉があるとはいえ、お袋一人で暮らすには辛い土地だ。

だから今は西のフォルクローレに移住してしまっただけ。そして、家と工房は、親父が酒に溺れ始めた頃から工房を支えていたジャッキーさんに託された。

「本当なら坊ちゃんが生きてるってわかったのなら、家も工房もお返しするのが筋なんでしょうが……ね」

ジャッキーさんは済まなそうに頭を掻いた。

「見てのとおり、今は妻も娘もありまして……ハーフオーガの俺には、ここを出てしまっただけならなかなか職場も家も難しいんですわ」

ジャッキーさんの言うことは痛いほどわかる。

ハーフは、ハーフ。ハーフエルフほどではないが、帰属するコミュニティに困るのは変わりない。

一度手にしてしまった安住の地。いくら義理があるとは

いえ、ホイホイ手放せるものではないだろう。

結局、俺はジャッキーさんとその家族に何も言うことはできず、ただその場を辞することしかできなかつた。

「アンディさん」

「……………」

振り向いてみると、セレンがいた。

温泉の浴槽内、当然ながら素っ裸だ。

「ここ、男湯だぞ」

「そうですね」

「まだ営業時間だ。誰が入ってきてもおかしくないぞ」

「そうですね」

セレンはことさら明るく笑うと、俺と背中合わせに湯の中に座つた。

「…………でも、私はアンディさんの雌奴隷ですから」

「……………」

「アンディさんがそう思ってくれる限り、絶対に、ずっと、雌奴隷ですから。どこまででも一緒ですよ」

「セレン…………」

セレンも、アップルとの会話の中で何か思うところがあつたらしい。

しばらく二人で、篝火の揺らめく男湯の中で、夜空を見上げる。

「…………セレン。親父、死んでたよ」

ぼつつと言つてみた。

「…………そう、でしたか」

「セレンは知らなかつたのか？」

「…………言いませんでしたっけ。私たち、あまりポルカの人たちと開けっぴろげに交流してたわけじゃなかつたんですよ。アップルが撃たれてからは別ですけど」

「…………そっか」

そういえば、セレスタが勝つまでは街に入ることすらできなかつたはず。

親父が死んだ頃だつて、あまり街を大つぴらに歩けたわけではないだろう。

それに彼女たちは俺自身に隷従を誓つただけで、親父たちのことは気にする義理はない。ハーフェルフは親にも疎まれた者が多く、誰かと因縁ができたとしても親の世代を気にしようとはしないという。

「どんな、お父さんだつたんですか」

「駄目親父だな」

俺は即答した。

「酒が弱いくせに酒好きでカード好きで、難しいことを考えるのは苦手で、あんまり細かい計算しさがなくて、お袋がない時はいつもドンブリ勘定で、よくお袋に怒られ

てた。あつちこつちにツケがあつて、綺麗なお姉さんに色目を使われると途端に格安で仕事受けちゃつたりしてな。そのくせ他人の借金の保証人には気軽になつちやつたりして逃げられたことが、俺の知ってるだけで四回ある」

「そ、それは……」

「でも、街のみんながいつも『スマイソン親方が困つてるんじゃないなあ』つて、手助けしてくれる、そんな得な親父だったよ。スリード工房でも親父に借金されたまんまだぜつていう職人は片手じゃ足りないぐらいいたけど、誰も俺から取り返そうとはしなかった」

懐かしい、親父の情けない愛想笑いと、それで「しようがねえなあ」つて色々帳消しにしてくれてる街の人たちの姿が夜空に浮かんでくる。

「なんかわかんないけど、いつも人の世話になりまくつて、その分誰のためにでも気軽に働いてみせる親父だった」

「……アンディさんみたいですね」

「お、俺は酒は好きだけど借金はしてないぞ」

「誰のためにでもすぐ必死になれて、優しくしてあげられて、その分みんなにお世話になつてるじゃないですか」

「……俺、親父似なのかなあ」

「かもしれないですね」

くすくすとセレンは笑つた。

「……だけどさ」

セレンの優しい声に包まれて、ぬくもりと柔らかさに触れて。

ガスが抜けたようだった俺の胸に、ようやく感情が戻り始めた。

「俺、親父にはまだなんにも返しちやいなかつたんだ」
涙が、出てくる。

ジャッキーさんから話を聞いた時には、アップルに冷たい態度を取られたことの余韻もあつて、シヨックではあつたけれど全然悲しいと思えなかつたのに。

「俺は……俺はさあ、親父にもつと親孝行してやりたかつたんだよ。親父、俺に言つてたんだ。いつか剣聖の鎧を合作しような、とか、大人になつたら毎晩交代で酒おごりあおうな、とか、ジジイにお前の命名権取られたから孫の名前は俺に考えさせろ、とか、お前がもつと大きくなつたら肩揉みも効くようになるんだらうなあ、とか……全部、やりたかつたんだ。親父にもらつた幸福を、返してやりたかつた。俺はポルカに生まれて幸せだつたつて、あんたの子供でよかつたつて、ここに帰つて来て伝えたかつたんだ」
途中から、鼻声になつた。

涙が止まらなかつた。

霊泉の中にポロポロと涙と鼻水を落としながら、俺はよ

うやく、親父を永遠に失ったことを実感していた。

「……いいなあ、アンディさん」

「……ひくっ……ううっ……っ」

「お父さん、本当にいい人だったんですね」

「……………」

何か答えようとしたが、答えられず。

そんな俺を後ろから抱き締めて、セレンは優しく語り始める。

「私は、物心ついた時には、エルフのお母さんは死んじゃってて……人間のお父さんも、私のことを厄介者だっと思っただけ。ハーエルフに居場所はないって、そればかりを実感しながら、育ったんです。私を受け入れてくれたのは、同じ居場所のないアップルだけでした。みんな、私たちの容姿はいいから、一晩だけのつもりで近づいては来るんです。でも、わかっちゃう。次の日になったら踏みつけにする気だっただけ……そうじゃなかったのは、アンディさんが最初でした」

「……………」

「トレント病って、知ってますか？」

「……………」

ふるふる、と首を横に振る。

「身体がだんだん木みたいになっていく病気……呪いの一

種とも言われています。私はその病気の元になった矢毒を、アフィラムの森エルフから受けました」

「……身内……?」

「ええ。……あそのエルフって、偏屈ですから。自分たちの意志を外れた血族の存在を、認めないんです。それで私はそのまま木になっちゃう運命でした。……それでもいいかなって思いましたけど。毎日毎日旅をするのに疲れちゃってたから」

「……………」

「でも、そんな私をアップルは助けようとしてくれた。私にとっただけアップルは半身みたいなものだし、アップルにとっでもそうだったんでしょう。でも、そんな私たちを見捨てないで、いつまでも傍にいてくれようとする人が現れるなんて、思わなかった。だからアンディさんは大切なんです。たとえアンディさんが同族と結婚してしまっても、ずっと飼われていたくらい、かけがえがないんです。だから私たちは雌奴隷になりたかった」

ぎゅうっ、とセレンは俺を抱き締める。

「子供の頃の、何も知らないおかげの独占欲だっというのには、わかってます。でもその独占欲だけで充分だった。私たちはそのまま独占されていたかった。汚い言い方をしてしまうと、アップルは、あなたがそう思うように教育しよ

うとさえていたんです」

「……そんなの、いらぬ。お前たちは、俺のだ」

「ええ。だから、アンディさんが未だにハーフェルが自分の恋人だつて公言していたつて、セレスタで知つた時、涙が出るほど嬉しかった。あなたは、私たちの持ち主だつて、本当にそういう人なんだつてわかつたから。だから、アップルもきつと喜んでくれるつて思つてた」

「……………」

「なんで、こんなことになつちゃうんでしょうね。……私たちは、そんなに贅沢な幸せを望んでいるわけじゃないのに」

「……セレン」

俺は、セレンのぬくもりを感じながら、搾り出すように言つた。

「俺、諦めないよ。ここでの思い出を、ここで見た夢を、なかつたことには絶対しない。いつか、セレンもアップルも幸せにしたいよ。……だから、アップルが俺のこと思ひ出せないならそれでもいい。アップルともう一度、恋してみせる。振り向かせてやる」

俺の立つべき場所は、この街には残っていない。受け継ぐべき家も、待つていたはずの少女も、俺を待つてはいなかつた。

だけど、俺は、やつぱりここで生まれ、ここで恋して、ここに帰つてくることを目指して生きてきたから。

今さら記憶がないぐらいなんだ。家がないぐらいでなん

だ。
俺はまだ現実に負けてない。何一つ苦勞なんかしていない。

俺は、幸せになりたいんだ。

遠くで十の鐘が鳴つた。

篝火は半分燃え尽き、このあとはもう誰も入つては来ないだろう。

だけど、どこか遠くで水音がした。

誰かがセレンの裸を見たかもしれない、と思ひはしたが、耳のいいセレンが気づいていないはずはないし、そして気にしていないようだったので、俺は何も言わずにセレンに抱き締められ続けていた。

◇◇

「……アンディ、スマイソン……さん」

「……………」

「わからない……全然、思ひ出せないのに……」

「なんで、こんな気持ちになるんだろう……」

◇◇

久々に迎えるポルカの朝は、必要以上にふかふかのベツ

ドで始まった。

「……うう、寒っ」

ディアーネさんが手配してくれた宿。

昔あの家で俺が使っていたベッドよりもさらにふっかふかで心地いいのはいいんだが、おかげで出にくくてしょうがない。

ポルカは癒しの霊泉があり、時に北西平原のみならず大陸の他の地域からさえ癒しを求めて人が集まるだけあって、宿は非常に豊富だ。

街の人口の倍くらいは余裕で泊まれるほどの宿がある。おかげで宿取りはスムーズで助かった。

「はい、アンディ君、足伸ばしてみてー。気合で」

「むんっ……!」

宿屋の食堂で、ヒルダさんに朝の診察を受ける。

昨日しこたま霊泉の水を飲み、温泉にも浸かったのだ。足が良くなってるはずということだ。

「……あつ、動いたわね」

「は……ははは、動いた。さすが霊泉だ」

なんとなく結果を知るのが怖くて、食堂に来るまで真面目に試みてはいなかったが、足首から先がちよつとだけ動いた。

「しかし、霊泉でもこれだけしか良くならないのか……こ

こまでが限界だったらキツイな」

「違うわね、ちよつと見てアンディ君」

ヒルダさんが俺のズボンを膝までめくり、傷痕のあたりをなぞる。

「このあたりでね、移植した鹿肉を安定させるために刻んだ紋と、霊泉の治癒力がぶつかってる」

「……はあ。つまり？」

概念を説明されても俺にはよくわからないだってば。

「要は純粋な再生には鹿肉の部分の紋が邪魔なのね。でもいきなり紋を消したら、もう歩行復活魔法もかけられないし血管だつて千切れ飛んじやうかもしれない。だからちよつとずつ紋をカットして、霊泉の治癒力が足の紋の部分の安定化措置に取って代わるようにすればいいの」

「……ええと？」

「安全にいくなら一週間ぐらいかしらね。毎日朝晩、刻紋を調整しながら霊泉に癒してもらえば、多分いけるわ」

「お、おお!!」

「しかしすごいわね、医療措置の魔術すら押し切って治癒が進む水なんて。研究したいわー」

最近色ボケっぷりは鳴りを潜め、医者としての部分で輝き始めているヒルダさん。

なんだかんだでこの人がいないと、霊泉の力以上のこと

はでできなかった。感謝しきりだ。

みんなで朝食を取っていると、宿にアップルとセレン、それと身なりの上等な口髭のおっさんが現れた。

「まあ、男爵様」

「お邪魔するよ、おかみさん」

気安く入ってくる口髭のおっさん。

ポルカを治める貴族、デュラン・グート男爵その人だ。

もう50歳以上のはずだが、温泉の効果でまだ30代くらいに見える。

「アンディ・スマイソン！ スマイソン親方の忘れ形見が

ここだと聞いて来たんだが」

俺は手を上げた。

「男爵！」

「おお、アンディ！ 久方ぶりだな！」

すたすたと寄ってきた男爵。

実は昔、さる縁でこの人とは懇意だったのだ。

「奥さん元氣？」

「おお、元氣元氣。最近五人目の子供を産んだよ」

「やるなあ男爵。奥さんだつてもう40過ぎ……」

「あわわわわ」

男爵は俺の口を塞いだ。

「あ、アンディ。どこで聞いているものかわからん、歳の

話題には触れてやるな」

「……気にしてるの？」

「かなり」

あのおっとり奥さんも歳を気にする年頃か……。

そして男爵はオホン、と咳払い。

「世間話はこの辺にしておこう。セレン君からあらかたは聞いた。セレスタ北方軍団にいたんだつて？」

「はい」

「連絡して欲しかったぞ。父上のことは聞いたか」

「……はい」

「……彼のことは残念だった。ルメイロ親方も頑張つてはいるが、やはりスマイソン親方ほどの人がいなくなつたのはポルカの大きな損失だ」

「……ありがたいお言葉です」

昨日思い切りポロポロ泣いたが、それでも領主ほどの人から残念がつてもらえらると、胸に残っていた哀惜の念にまた火がつき、泣きそうになる。

しばし、しんみりした空気が流れた。

「……まあ、その話もおいおい……としよう。早速アップル君を覚醒させてくれたそうじゃないか」

「ええ」

「記憶がかなり飛んでいるということで、私も相当警戒さ

れてしまったよ」

はっはっは、と苦笑いする男爵。その向こうで同じく苦笑いするセレンと、なんともいえない表情で俺たちのやり取りを聞いているアップル。

「だが安心してくれ、彼女の身の安全は私が預かる。決して、二度と北のエルフたちに危害は加えさせない」

「み、身の安全？」

「ああ。未だにな、彼女の狙撃事件が北方エルフたちの意見を分裂させていて、そのおかげで平穏が保たれている部分もあるんだ」

アップルを「同族」とみなすか「余所者」とみなすか。

その辺はエルフたちの中で意見が割れている。

客観者のいない身内だけの問題ならハーフエルフなどただの余所者でいいのだ。

だが、アップルは人間の介在する位置にいた。

人間にとってはアップルはエルフの眷属でもあり自分たちの眷属でもある。その意味で救助という義務を果たした人間族は道義を通してている。

一方、当時は「強欲な人間に対する制裁」という名目で射殺という手段に出たエルフたちだ。誤射で本来人間族とは関係のない、第三者的立場であるハーフエルフを殺しかけたという事態は大失態であり、またそれを救助しなかつ

たということは人間族から見た道義も通していない。

これはトロットの人間を野蛮な民として拒絶し続けていたエルフたちの言い分を大きく挫くことになった。

まして、アップルは一応身元が判明している。このあたりを縄張りにする者とは氏族が違うとはいえ、北方エルフの血を引く娘だ。人間族から見れば紛れもなく北方エルフの近親者、罪は決して小さくはない。

彼女の痛々しい姿はエルフの語気を大きく弱め、今までの外交交渉を肅々と進めるシンボルとなっていた。

「だが、彼女が覚醒してしまうことで、向こうの態度がどうなるか……まだわからないのだ」

男爵は小さく溜め息をついた。

「眠っている者には、何も問えぬ。だが目覚めてしまえば、それは静かなるシンボルではなく、欲得もある生き物に過ぎん。極端な話をしてしまえば、一族を侮辱したことにして改めて『異物』として処断し、我々への態度をまた硬化させる言いつにすることも可能なのだ」

「そんな……そこまで卑怯な真似を、エルフが？ プライドがあるんじゃない」

いくらエルフも長生きで魔法ができるだけのただの人はいえ、そこまで俗物じみた真似をするものだろうか。だが。

「ありえない話ではありませんわ」

そう言って、すぐ近くのテーブルにいたオーロラがティ
ーカップを置いた。

「北のエルフは頑迷で有名ですわ。誰にも犯されることな
き楽土があるからこそ、最後の最後には物事の解決を放棄
して引き籠もってしまうことができるからと聞きます」

上品にそういうオーロラが俺の連れだと思っていなかつ
たのか、男爵は目を白黒させる。

「こ、このエルフのお嬢さんもお前の連れかね」

「ええ、まあ。……この辺みんな、その、同僚とか上司と
かその他でして」

「ほ、その他とは。寂しいことを言うのう」

「あ、アタシはその他だけ!」

いや、ややこしいから黙ってお願ひ。

……と思つたら、男爵、馴れ馴れしく俺の頭を抱え込ん
で小声。

「……や、やるなあお前。綺麗どころ揃いじゃないか」

「いやその」

「ポルカに来たからには温泉紹介していくんだらう?　グ
ッジョブ、さすがアンデイ」

……このおっさんと俺の縁。

……15年前、たまに温泉覗き仲間でした。

覗きがばれたとき、金貨10枚の約束でわざと派手な逃走
をして男爵の逃走時間を稼いだりもしました。

……ああ。情けない思い出。

「いい機会だ、自己紹介させていたただこう。ポルカ男爵、
デュラン・グートと申します」

口髭を軽く整えて、男爵が俺の連れの一団に向かって優
雅に一礼。

彼女らは目を見合わせて、順番に自己紹介する。

「セレスタ北方軍団クロスボウ隊、ディアアーネ百人長。世
話になる」

「同じく、アンゼロス十人長です」

「クラブスの森エルフが長ディオールの娘、オーロラと申
します。お見知り置きを」

「砂漠大迷宮のジャンヌ・クラックスだ。よろしくだよ」

「えーと、砂漠南のタルクでお医者さんしてます、ヒルダ
です」

そして、最後に残ったライラは、すつくと立ち上がって、
窓際まで歩く。

窓を開けると大雪原。その窓を背にして。かつこよく逆
光気味のモデル立ちをして。

「ラッセル迷宮のドラゴンパレスの主にしてそこなアンデ
ィ・スマイソンの乗騎、黒竜のライラじゃ」

ばさつ、と豪快に服を脱ぎ捨て、全裸脱ぐな。

「おほっ」

鼻の下伸ばす男爵。

……そして、脳が揺さぶられる感覚。

一瞬のあと、忽然とライラの姿が消え、外の雪原にブラツクドラゴン出現。

「う、うわああああああ!!」

「ひいっ!!」

腰を抜かす男爵とアツプル。あ、セレンがなだめてる。

「だからいちいち脱ぐな! あといちいちドラゴン体にならなくていい!」

「ほほ、茶目っ気じゃ、茶目っ気」

すぐに人間体に戻るライラ。

まったくもう。人を驚かすのに味を占めやがつて。

昼からは俺は温泉療養。

たまに上がつてヒルダさんに紋を書き直してもらいつつ、

一日温泉でのんびりする。

……ということをやっていたんだが、途中から妙なことになった。

「まどろっこしいわねー」

「はい?」

何度も温泉に入つては出てを繰り返してヒルダさんのところに通う俺。その足をいじりながら、ヒルダさんがいきなり妙なことを言う。

「そうだ、もう一緒に入っちゃえばいいじゃない♪」

「姉上!!」

ポンと手を叩き、そのまま俺、女湯へ。

……待てマズイ。

さすがにガキの頃ならともかく、大の大人になつた今、女湯なんて入つたら大惨事だ。

「ちよ、ちよつとヒルダさん!!」

「はい、ディーアーネちゃんもアンゼちゃんもライラちゃんも、みんな来る! みんなで行けば大丈夫♪」

「そういう問題じゃないでしょーが!!」

「……なるほど、さすが姉上。肉の壁作戦か」

「ちよつとディーアーネさんも納得してないで!!」

で、本当に女湯に放り込まれてる俺。

「うう……地元女に見つかつたらコトだ……」

「大丈夫大丈夫、仲良しの女の子がおしくらまんじゅうしてるようにしか見えないわよ♪」

「ふふ、こういう、いつ見つかるかわからないというのも燃えますわね」

「ジャンヌ、泳ぐな！」

「アンゼロス、硬いこと言うなだよー」

「ほほ。良い湯じゃ。どれ、ついでに二人二人孕ませる気はないかえ？ 大陸に響くほど強力な霊泉じゃ、一発懐妊くらいできそうなものを」

「むう、そういえばアンデイ、昨日は一人寝だったな？」

「いやだからあの、せめて俺に話し掛けなだけでいいだけませんかディアーネさんも」

全方位を女たちにガードされて女湯に入る俺。

見つかったらヤバイ。マジヤバイ。

というかそれ以前に身体も視線もエロすぎて勃起が全く収まりません。どうしよう。

……と。

「あー、ディアーネさんたち」

「ヒルダ先生」

そこに、セレンとアップルが現れた。朝から別行動の二人だ。

もちろん二人とも裸。見た感じアップルのほうがちょっとだけ大柄で、おっぱいとお尻も大きい。

「少しは心の整理できた、アップルちゃん？」

「えと……まだ、です」

「まあ、昨日の今日では完璧についていうのは辛いかしら。

時間はあるんだからゆつくりしなさいな。長いこと寝通しだったからお肌も荒れてるでしょ、ゆつくり浸かりましょう？」

「はい……」

アップルはどうやらヒルダさんには懐いている様子。まあ、ちよつとだけだ。

セレンはディアーネさんやアンゼロスたちと和気藹々。

アップルは時々そんなセレンを横目でチラチラ見る。

「やっぱり、親友取られたみたいで辛い？」

「えっ」

アップルはぎくりと肩を強張らせた。

……ああ、そうか。ずつと二人つきりだったって言うってたもんな。

いつの間にかセレンに友達が何人も増えていたら、寂しいか。

「……いきなり何もかもが変わりすぎてて怖いのは、仕方ないわ。でも、時間は巻き戻せない。少しずつでいいから受け入れてあげて。……大丈夫、セレンもアンデイ君も、あなたをずつと愛してる。間違いないわ」

「……はい」

「アンデイ君って、ずつとあなたのこと、15年間想い続けてきたんだから。私たちにとつてみれば妬ましいことこの

うえないわ」

アップルは複雑な顔をした。

「でも、皆さん首輪つけてますよね、あの人の名前入りの」

セレンを始め、アンゼロスとオーロラ、ライラとジャン

ヌ。みんな風呂だというのに外していない。

「全員、奴隷とか言ってるんですよね。さすがにあの人

節操なさすぎるんじゃないですか」

……ぐうの音も出ない。

「ほほ。気にするでない」

「首輪つけてない先生や百人長もみんなお仲間だよ。十

人長ならきつとみんな幸せにしてくれるだ」

「セレスタでは一人の男性に一人の女性とは必ずしも決ま

っていないのです」

「……まあ、その。なんだ。アイツ、首輪つけて誘わない

となかなか抱いてくれないから」

「異常だと思うんですけど」

アップルの言い分が一方的に正しい。

……うん。俺一言も喋ってない（というかオーロラとラ

イラの背中に隠れてるだけ）けどダメージ特大。

そりゃ今朝だって俺に近づいてもくれないよなあ。

「……異常だとは思えないんですけど」

繰り返すアップル。

もうやめて俺のライフはもう。

「……でも、なんででしょう。あの人のこと見てると、時々

胸が疼くんです。全然知らないはずなのに、きゅんって」

「……アップル、ちゃん？」

アップル……？

もしかして、俺のこと、まだどこかで覚えて……？

「私にとつて、今までの人生なんて、セレンと出会ったこ

と以外はほとんど何も無いようなものでした。いい思い出

なんてなかった。どこにも居場所なんてなかった。私のこ

となんて誰も……いらなかった」

アップルは耳をへろつと垂らして、俯く。

「だから15年くらい消えたって構わない。セレンが元気な

んだもの、私もここに生きてるもの。知らない人とのセッ

クス一回くらいでこんなに何もかもよくなったなら、それ

でいい。それで納得できると思うんです」

「でも、できない？」

「はい。……私が今、一番怖いのは、この、きゅんってな

る気持ち」

アップルはヒルダさんに訴えかけるように身を乗り出した。

「何も知らないのに、何も、覚えてないのに、全然関係な

くあの人を見ると頭の芯が痺れて、お腹の奥が痺れて、胸

の奥が絞られちゃう、この感情が怖い……!!」

「……アップルちゃん」

「認められないよっ……私は、自分の好きな人くらい、自分で選びたいっ……運命とか、本能とか、そんなの言い訳だもの。そんなのに私、屈したくない……!!」

……アップル。

そうか。

そうだな。どこが好きかわからないのに勝手に魂だけが相手を欲する、なんて。

言いようによっちゃロマンチックだけど、それこそ洗脳されてると変わらない、気味の悪い感覚だろう。

特に、自分の意志以外の、権力とか種族とか社会とか、そういう全てに翻弄はんろうされるハーフェルフにとっては、何よりも忌むべきことなのかもしれない。

「……そう、か」

思わず声が出ていた。

「!!」

思わず。

つまり、うっかり聞かれてしまった。

「あ、アンディさん、いたん……ですか」

昨夜の自分と同じ状況の俺を見て喜ぼうとして、ギクリと笑みを止めるセレン。

アップルが目を見開いて硬直していた。

ガクガク震えて泣き始める。

そして。

「いやあああああああああああつ!!」

ゴツーン、と強烈きんげんなストレート。

鼻血を吹いて湯に沈む俺。

「あ、アップル!!」

……さ、錯乱するとセレンよりだいぶ乱暴だな君。

「ほ、霊泉でよかったのう」

全くだ。

俺が温泉療養を始めて三日が経過した。

「ふんふーん♪ ……このくらいまでは大丈夫かなつと。

はいアンディ君、足動かしてー。違う違うおチンポじゃなくてひっだりっあしー」

「い、いや、全力で下半身に力入れているのにちんこだけ動かすなって無茶ですよ」

「それもそうかしら」

平然と素っ裸で俺の足の診察をするヒルダさんの眼前で、ちんこ、もとい左足は少しずつつ持ち上がる。

20度ぐらい。それ以上は鼻息荒くしても厳しい。

「はいお疲れ様ー。感覚のほうは戻ってきてる？」

「そういえば、ちよつとぼんやりはしますけどなんとなく足引きずる感覚が戻ってきてます」

「なる、ほ、どー。うんうん。計算上方修正。あと三日でいけちゃうかしらね」

「おお」

「あ、杖なしで歩けるようになるまでの日数よ？ 傷痕完全に消えるまでにはまだ一週間は要ると思うわ」

「傷痕……消えるんですか」

「というより鹿肉部分が完全に自前の組織に駆逐される感じになるのかしら。今の調子ならいけちゃいそうなのよねー、毎日段々と鹿肉ラインが短くなってるし。見ててわかるでしょ、ほら」

「……言われてみれば」

ヒルダさんの指摘のとおりには、鹿肉で補った移植部分は当初の2/3くらいになつてはいる。

これが消えたら療養完了。晴れて俺は五体満足、一応誰にも迷惑かけない身体に戻れる、というわけだ。

「それにしてもすごいわねえ」

「ええ」

「ホント惚れ惚れしちゃう」

うっとりするヒルダさん。

……霊泉の効果にこそ感心していたものと思っていたの

だが、どうやらうっとりしていたのはそこじゃないようで「で、アンデイ君、いつになったらエッチ再開してくれるの？」

「ちよつ……」

あけすけに聞いてくるヒルダさん。

「おいアンデイ」

少し離れて聞いていた酒屋のジョニーが、目はガン睨みしつつ顔の下半分は中途半端に笑っている顔で近づいてきた。ああ疑惑の顔だ。

「どういふことだ聞かせろ。そもそもヒルダさんとお前はどいう関係なんだ」

「い、いや、その」

「えへへー。……えーと、今のところ……」

「ヒルダさん、ちよーつと黙ってようね」

「大体この野郎！ アップルちゃんとセレンちゃんにツパつけてただけでも気に食わないのに美人人妻ダークエルフ超美乳が主治医だと!? 許せねえ！」

「お、お前だつてちゃんともう嫁いるしいいだろ！」

花屋のジェシカはこいつと結婚したらしい。

こないだ会ったが相変わらずいい乳してた。割と幸せ者だと思うんだがなあ。

「大体、その、ヒルダさん、ここは男湯ですよ？ アンデ

イの治療のためとはいえ、そんなにべつたりくつついて混浴しちゃうのは羨ま、いや、俺らはおっぱい見れて嬉しいですがその、ねえ？　いつアンディがその気になって襲っちゃうか」

「うふふー。大丈夫よ、まだお風呂で Y A R R I T A I 放題できる体じゃないから。できるくらいまで治ったらちゃんと隠れてするからご心配なく☆」

「か、隠れて？　隠れて何をやらかすんですか？」

「それはもちろん」

「ヒルダさん、面白半分て俺をこれ以上苦しい立場に追い込むのはやめて」

「えー、事実（予定）を言ってるだけなのにー」

女湯に連れ込まれるのだけは勘弁してもらい、だからといって男湯に女子がぞろぞろ入っても困るので、そもそも必要最低限であるヒルダさんだけ一緒に入ってもらうことにして数日。

ヒルダさんは例のタルクルールと、ついでに俺への誘惑意図が絡まって、割と早い段階で薄布装備さえ放り出してフルヌードで俺とべつたり入浴していた。

まあポルカにそんなにすごい剣士がいるわけでもなし、いきなり襲われても幻影魔法の扱いに長けたヒルダさんから軽くあしらえてしまうだろうが、それにしたってあけす

けすぎるのはなんだかなあ。

セレンやヒルダさんの地味な努力で、アップルとの間もちよつとずつちよつとずつ、野生動物の餌付けぐらいの速度で距離が縮まっている。

普段は男爵家に泊まっているアップルとセレンが宿屋に食事しに来て、俺の近くに席を取るところから関係修復への訓練は始まった。

「ほら、アップル。記憶がないのはアンディさんだつて承知してるから。別にいきなり襲われたりしないよ」

「そうそう、アンディ君って確実に許してくれる子相手に魔物だけど、それ以外には割とヘタレだし。いざとなつたら襲ってもらうのは私が先だから」

「あ、ヒルダさんずるいつ、私ですよ」

「み、妙な順番争いはどこかよそでやってください……だ、大体、怖いのはアンディさんじゃなくて、意味もなく許しちゃいそうな自分なんですよっ！」

「……そういう告白って聞こえないところですか……じゃないのかな」

丸聞こえなんです。

関係修復作戦、その2。

思い切ってデート。

……といってもアップルは必要以上に俺と距離を置きたがるし、俺の足はまだ杖が必要だし、ポルカの地理には今は二人とも明るくない。

デートとはいえ、そんな二人を適当に放り出すわけにもいかず、仲間の誰かがついてこないといけない。

というわけで、デートのたびに二人の間に誰かがいる状態の添乗員つきデートとなってしまう。

……せめて俺の足が完璧に戻れば、何かあっても駆け寄れるからいいんだけどなあ。

「本来ライバルに塩を送るということ自体少し不本意ですが、まあアンディさんの一番はわたくしで間違いありません。安心してゆっくりいらつしゃいな」

「オーロラ、お前は協力してくれる気があるのかないのかどっちなんだ」

「少なくともアンディさんの意向を妨げる気はありませんわ。しかしアンディさんの一番の女だという自負も譲る気はございません」

持ち回りとはいえ、よりもよってコイツに付き添われて何が進展するんだ。

デートといってもポルカ周辺には本当になんにもない。

あると言えば霊泉と霊泉と温泉とアップルたちの使っていた猟師小屋くらいだ。他にもあるかもしれないけど少なくとも今の俺にはわからない。

「ここでセレンさんたちは暮らしていたのですね」

猟師小屋。

森の傍にあり、動物を狩りに行く際に猟師が拠点とする施設。

といってもポルカの猟師は季節労働で（冬は大変なのであまりやらない）、また狩りなんかより巡礼者の相手のほうが金になるので年によっては全然使われなかつたりもするうち、気づけばアップルたちの根城（まじり）になっていた場所だ。

「一応、そのはずだな」

「……こんなところで、十年以上も私たち、暮らしてたの……？」

猟師小屋の扉を開けると、埃の匂いが充満している。

中は、俺が知っている頃とは随分違っていた。

ベッドはセレンが好みそうな明るい色の掛け布団。

鍋や食器など、生活に必要な道具は俺とアップルが抱き合っていた頃より随分と揃っていて、しかしそれらも二年の間にすっかり埃が積もっていた。

「……………」

アップルはそれらに手を触れ、記憶を呼び起こそうと努

力をしているようだ。

「どう？」

「え、あ、ちよつ、あ、あなたは近づかないでっ！」

「……うう」

超警戒されていて悲しい。

「そんな言い方はないんじゃないやありませんこと？」

「……ご、ごめんなさい。何か思い出しそうで……という
か、ちよつと思いい出したんですけど、その」

「思い出したのか!？」

こ、これは凄いい進展か!？」

「いえ、あの……な、なんだかわからないんですっ！」

「……そ、そう」

アップル自身になんだかわからないと言われたら引き下
がらざるを得ない。

聞いてるほうはアップルが何を感じたのかなんて知りよ
うもない。

……アップルは深呼吸すると、呟くように言う。

「……そ、その、自分が何してたかだけは、ちよつとだけ

……破れた絵巻の途中みために、見えたんです」

「？」

「……なんだか、男の子に裸で抱きついてるイメージ……
求められるままに身体中を触らせて、男の子のちっちゃい、

その、ペニスを……口で、してて」

「……それ、俺」

「…………っ！」

真っ赤で睨まれた。

「ど、どうい子供だったんですかつ！ あんなちよつちや
いくせに延々とそんなことっ！」

「……そういことが大好きな子供だったとしか」

「そ、それにつ……き、気持ちいいとかあんまりなくて、
なんだか酷く焦らされてる感じがして……あなたがいな
くなつたあと、一人で慰めて……」

「…………焦らしてたつもりはなかつたんだ。当時はちん
こ突つ込むとこ知らなかつただけで」

「ひ、酷つ……どうい子供なんですかホントに！」

ある意味ワケわからん関係すぎるよなあ。今考えても。

……オーロラは溜め息をついた。顔が赤い。

「アンディさん、子供の頃から随分と、その……お盛んで
したのね」

「ま、まあ、それは否定できない」

「それで……焦らしに焦らしてメロメロにした挙句、その
まま置き去りにしたせいで、雌奴隷などという地位に自分
から喜んでなるように仕向けたと……そして、その影響
を受けたセレンさんが、あんな風に」

「……人聞き悪いが、事実だけ見るとそんな形かもしれない」

すごいガキだ。15年前の俺。

オーロラは再び溜め息をつく。

「そして、そんな奉仕が忘れられなくて、15年間も悶々としていたのがアンディさんの異種族好きの始まりですね。

……どっちもどっちではないですか」

「そうとも言える」

「……だ、だから寄らないでって言うてるんです！ そんなので身体が反応するとか納得できないですから！」

……反応してるんだ。

そんなアップルにひらひらと手を振り、オーロラは俺に向き直る。

「ならばわたくしが代わりに慰めて差し上げても、文句はありませんわね？」

「代わり!？」

「アップルさんは置いておきましょう。……わたくし、そんな思い出ひとつに負けるなんて納得いきませんわ。わたくしが完膚なきまでにここでの出来事を上書きして差し上げます」

「お前も唐突に見えない何かと戦い始めるんじゃない」

「わたくしはあなたにこんなにも焦がれているのに、せっ

かくのアンディさんの積年の愛にウダウダと文句を言い散らし、腰の引けた態度で言い訳している女に遠慮など無用です。だから今ここで、あなたとの愛を確固たるものにするのです。いわば、この場所は原点、陣取りゲームの隅のコマ。ここさえ制してしまえば、いずれわたくしに敗北はありません」

「相変わらず過激なんだか明後日なんだかわからないな、お前は！」

距離を置いて座っているアップルをフンと鼻で笑い、オーロラは服を脱ぎ出す。

そうしてエルフの姫が夢中になって俺に体を押し付けるのを、驚きの瞳で見つめるアップル。

「……え、エルフなのに……あなた、別にハーフエルフとかじゃないのに、寂しい境遇とかじゃないのに、何でそんな人と……?」

「人と恋するのがハーフエルフの特権だと誰が決めたのです? 本来エルフは、ただの人より強きもの。人に犯されて生まれるばかりがハーフエルフでもないでしょう」

「そ、そうだけども……でも、あなたみたいな血筋のいいエルフなら、他にも」

アップルの言葉を、オーロラはびしやりと止めた。

「お黙りなさい。好きなものは好き、欲しいものは欲しい。

心を、愛を、一体何で縛られてたまるものですか。理性とか本能とか、建前とか、そんな分類はあとでよろしい。わたくしが好きと決めたのだから、世の中がなんと言おうとも好きなのです。邪魔なら世の中を蹴散らしてしまえばよろしい。わたくしの愛が許される世界にしてみれば良い。今を生きているのは過去を嘆くためではありません。未来を夢見て、この手で定めるためですわ」

堂々たる演説。

……俺のちんこを擦り立てながらでなければカッコもついたのであるが。

「そ、そんなこと……あなたが不自由してないから言えることで……」

「あら、今のあなたが何を不自由しています？ 本能が求める愛、大いに結構。それを貫くことに一体何の妨げがありますか？ あなたは自らのかわいそうな境遇に慣れきっているだけ。かわいそうでなくなった、食欲に幸せに浴する自分に幻滅するのが怖いだけではありませんか？」

「…………し、知った風なことを言わないでっ」

「あら、確かに喋りすぎましたわね。……アンデイさん、お待たせしてしまいました。申し訳ありません……んっ」

オーロラは勝ち誇った笑みを浮かべ、俺の唇に吸い付いて、ゆつくりと埃まみれのベッドに押し倒す。

「あなたはそこで、せいぜい自分に同情していらっしやい。わたくしはその間に欲しいものに手を伸ばしますから♪」

「あ、あんまりイジメるなよ、記憶がないのはアップル自身のせいじゃない」

「いいえ、過去を恐れ、自らを恐れ、世界を恐れ、足踏み続けるのは間違いないあの女自身の問題ですわ。定まった過去を打ち破り、下書きなしの白紙の上に未来への足取りを刻む勇氣は、時間だけでは手に入らないのです」

オーロラは俺の上に跨り、自らの熱い膣の中に俺を迎え入れる。

「あなたは、それがある……だから、あなたと未来へ歩み、あなたを支え、あなたの愛に浴することは、わたくしのつまらぬ過去の誇りと引き換えになり得るのです♪」

「お、俺、そんなに大した奴じゃ……」

「いいえ、誰もが認めておりますわ。あなたは、手に入れた女全てを幸せにしてくれると。そのためにどれだけでも歩み続けてくれると」

「…………」

「だって、これだけの良い女を飼いながら、あんな女のことも少しも諦めていないんですもの♪」

「っ……!!!」

アップルは、俺の上でぐいぐいと腰を振るオーロラをじ

つと見た。

オーロラは相変わらず若々しくぷりぷりした性器で俺をしつかりと吸い込みつつ、アップルに自信と慈愛に満ちた視線を返す。

「……オーロラさん、あなた……」

「ふふっ。……わたくしは、アンディさんを愛しています。この身の一片、卵子の一粒まで残らず、アンディさんを熱愛しております。そのことだけは誰にも負けることはありません。いつ誰の挑戦でも受けますわ」

「……………つつ」

アップルは、立ち上がる。

胸のあたりを押さえて、ふらふらとベッドに歩み寄って。

「……まだ、心は、思い出せないけれど」

「……………」

「あなたのことを好きだった想いは、ここに帰ってきてくれないけれど」

「うん」

「……それでも、私は愛してもらえますか……?」

アップルは、泣きながら。

「私は、甘えていいんですか?」

「……ああ、いくらでも……つつ!!」

「そうですっ……!!」

ぐちゆり、と腰がかち合い、オーロラと俺は同時に軽く絶頂する。

……オーロラの股間に容赦なく注がれる精液。一瞬も外に逃がそうなんて考えない、腰と腰の抱擁。

それを見ながら、腰の奥からの本能に震えるアップル。

俺はそのまま彼女を抱き寄せた。

……起きた彼女への最初の抱擁だった。



「吹雪ふぶきいてきたな」

「ふむ。アンディたちは大丈夫かのう」

「大丈夫、とは?」

「何やら男爵とかいう男にキナ臭い話も……む」

「ライフ?」

「……ティアーネ、少しマズいやもしれん」

「どうした」

「……この吹雪、竜の匂いがする」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>